

日本椿紀行（10）

『巨勢山のつらつら椿』を訪ねて

つくば市 坂上 博

“巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を” 701年（飛鳥・大宝元年）9月、持統大上天皇が文武天皇とともに紀伊国「紀の牟婁（むろ）の湯」（白浜温泉）に行幸したとき従者の坂門人足の詠んだ一首。椿に関わる方はどなたでも存じあげる、あの「巨勢山」の椿を訪ねる旅にお誘いいただいた。

3月の下旬、最初に訪れたのは山の辺の道のほぼ中間点に位置する関西花の寺第十九番「長岳寺」。824年（平安・天長元年）淳和天皇の勅願により空海が大和神社の神宮寺として創建された古刹である。

「大門」をくぐり平戸ツツジの生垣が続く玉砂利の緩い弓なりの参道をくぐり白壁沿いに右に曲がるとピンクの落ち椿が道いっぱいに染めてなんとも美しい。そこから正面にまっすぐ我が国最古の平安時代から現存する「鐘楼門」（重要文化財）がある。門をくぐった先には『藪椿』の赤が遠目にも可愛くちらちらと見え、盛時には四十八の塔頭があった12000坪の静かな境内には開花の時期を待ちかねるカキツバタ等の草花が群生し、その周りを石垣と共に『藪椿』の古木が包み込むように点在する姿が印象的であった。

長岳寺から崇神天皇陵、景行天皇陵を左手にクルマは南下、かつて持統大上天皇の紀伊国白浜行幸への道程と同様に藤原京から飛鳥を横切り古代豪族巨勢氏の本拠地であった「巨勢山」へと向かう。

「巨勢山」（296m）は椿の名所として名を知られ、吉野口の西方に美しい円錐形の姿を見せる神の山である。坂門人足が「巨勢寺」で詠んだと伝わる歌の解釈は“巨勢山に葉がてらてらと光り連なる椿、この椿をじっくり見ながら偲ぼうではありませんか 椿の花満開の春野のありさまを”といわれるが、また一方では古代、椿は霊力の宿る聖なる木といわれ、病を押して白浜まで行幸された“持統大上天皇の健康と長寿を念じて聖なる巨勢山の椿に呼びかけた歌”ともいわれる。翌702年（大宝2年）12月22日、持統大上天皇は藤原京で58年の生涯を閉じる。

巨勢山の麓、JRと近鉄が交わる吉野口の道路わきの駐車スペースに車は止まる。そこからすぐに登り口があり、椿の参道を登ると小さな山門があり玉椿山「阿吽寺」（あうんじ）の札が掲げてある。

「阿吽寺」は白鳳時代に建立され平安時代に焼失したと推定される「巨勢寺」

の子院で、平安時代阿吽法師という僧が巨勢川氾濫の時に村人を救済したことから、法師を崇めて巨勢寺に子院を構え、阿吽法師の名を寺名にしたと伝わる。1362年（南北朝・貞治元年）の火災で全焼し、江戸時代初期に再建されるがその後も衰退を重ね、1872年（明治5年）遂に廃寺となる。昭和60年今の本堂が再建され地域有志の管理する無住の寺となる。

境内には樹齢200年と伝えられる山門脇の古木をはじめ約400本の椿があり、本堂の右手には椿に囲まれて昭和58年に建立された坂門人足（さかとのひとり）の歌碑がある。寺の山号は「玉椿山」というように裏山には日本古来の照葉樹林に自生していた藪椿の樹林が広がっており、万葉集の歌が詠まれた1300年前は現在のように杉や檜も混じっておらず、もっと多くの藪椿が連なっていただろうと想像する。またそこは巨勢山の麓であるが、残念ながら近すぎて巨勢山の美しい山景を仰ぐことはできなかった。

「阿吽寺」から1.5kmほどのところに水泥（みどろ）集落がある。ここには珍しくも個人が所有されている6世紀に築かれた国指定史跡の「水泥北塚穴古墳」と「水泥南蓮華文古墳」がある。さっそく所有者の西尾さんにご挨拶し快くご案内いただく。

「北古墳」は邸内裏庭の、大屋根が連なる奥に赤い炎を上げるがごとく咲く『藪椿』の株元にあり、築山となっている径約20mの円墳に全長13.4mの横穴式石室は大きな花崗岩で築かれ、中に入ると棺は無く、十分な高さとお深さが体感できる。

「南古墳」も自宅から50m離れた道沿いの西尾さんの土地にあり、石室には二つの家形石棺を安置している。手前の石棺の蓋に蓮の花をかたどった六弁の蓮華文がくっきりと見え、古墳文化の中に仏教文化が入ってきたことを示す貴重な資料とされている。径約14mの円墳の中腹に樹齢150年を越える『墳丘の五色椿』（根回り1mを超える）の古木があり、白、薄紅、絞と気品のある花色に咲き分け古墳を飾っていた。

最後に訪ねた医王山「船宿寺」は千年の法灯をずっと守り続けている真言宗の名刹。725年（奈良・神亀2年）、船形の大盤石の傍らに行基が庵を結び薬師如来を祀ったことからと伝わる。

金剛山が一望のもと。天孫降臨の台地、高天原がある神話のふるさとであり、大和朝廷よりも前に栄えていたという葛城王朝ゆかりの地である。そんなロマンあふれる山里に樹影濃い山を背負うようにして佇んでいる。

門前から境内にかけての1000株以上のツツジの植栽が有名である山門をくぐり、裏山の麓の椿を愛でながら方丈前になると偶然に住職と出会う。名古

屋から椿を目的に訪ねた旨を伝えると、突然の訪問にも拘らず住職は遠方からの来訪に喜び、通常は入れない池泉回遊式庭園とその中に咲く『椿』をご案内いただき、さらに方丈裏手の住職コレクションの椿園と入山禁止の裏山の『藪椿』の古木まで隈なくご案内いただいた。椿園は『菱唐糸』『金魚葉椿』など『園芸種椿』を中心に、基本的に1種を複数でコレクションされ、裏山から見下ろすと整然とした境内の全景が金剛山の山並みと相まって実に美しい。住職にはご丁寧な山門までお見送りいただき「船宿寺」を辞去した。

帰りの車中、今回の旅にお誘いいただいた名城つばきの会武藤常務理事（日本ツバキ協会会員）の発案で、突然の訪問にも拘らず親切にご案内いただいた「船宿寺」住職への御礼として名古屋城の『御殿椿』を贈ろうということになった。

私は都合で行けなかったが、生産者の方も一口乗って立派な株を1週間後に武藤さんがお届けしたところ、住職は奥様共々ことのほか喜んでおられたそう。機会があれば再訪し「船宿寺」に咲く『御殿椿』と坂門人足が歌を詠んだ地と伝わる「巨勢寺」跡から巨勢山の美しい山景を仰ぎ愛でたいと思う。